

『風草紙』論

——森島中良の体制批判——

石 上 敏

森島中良が森羅子の号で著した最初の読本『ふうそうし風草紙』(半紙本五卷五冊)は、彼の読本四作の中で従来最も評価が高く、しばしば論及の対象とされて来た。例えば、その典拠であり、また『雨月物語』との関係である。

水谷不倒著『せんたくこくしょく選択古書解題』(著作集七)所収に全九話の梗概が載り、「内容の充実した作」と評されたのが『風草紙』評価の嚆矢である。中良がこの作ではじめて用いた戲号「森羅子」は、従来の戲号「しんらばん森羅万象」に基づくと同時に、「水滸伝」や「三國志」などの作者に擬される羅貫中(羅子)を明らかに意識したものであった。この一事からも、この作に対する作者の自信が窺える。またその自信は、版元の言になぞらえて「此書を梓に上せて発売さば、我は善価を得て、糞葉を潤し、人は珍書を得て、談柄の助とせん」(「此書の售る事、秋の落葉の風に散が如くならん」)などと自叙に書き付ける姿勢にも顕われている。

翻案怪異小説の権輿「御伽婢子」の典拠を『うげんしんわ翫燈新話』(「しんわ新話」とし、読本の嚆矢「英草紙」「しんや繁野話」の典拠を「古今小説」「古今奇観」「しんや警世通言」「しんや拍案驚奇」に求めた自叙はよく知られるが、中良がこの作でむしろ『雨月物語』を意識していたことは、既に指摘される通りであろう。現在知られる限り『雨月物語』の作者が秋成であることを最初に明記したのも、ほかならぬ中良であった。

二

『風草紙』は寛政三年十月の「東都隠士 森羅子」の自叙をもつ。「しんや割印帳」(以後江戸出版書目)によれば、同年十二月十五日に「しんや諷風草紙」として不時割印を受け、翌寛政四年正月に『しんや諷風草紙』の外題で刊行(北尾忠翁政美画、上総屋利兵衛板)とされ、出版の経緯について問題はない。

『英草紙』や『しんや繁野話』を踏襲した奇談集の構想に因しては、すでに天明九年(寛政元年)正月の伏見屋善六「しんや戯作目録」に、

森中良先生述

奇談梅冊紙

全四冊

此書は英草紙■野佔

書なり

と見え、この頃の中良に、読本執筆の明確な意図と準備があったことを窺わせる。

また、上総屋利兵衛の初板奥付には「風草紙／後編 香草紙」という副出広告が載る。更に後年に至り、享和三年新板の蘭香堂蔵版目録にも、「小崎梅冊子五冊 二代目風来山人編 おもしろき奇談なり」と見える。後者は当時中良と親しく交わった(「狂言綺語」など)三馬の関与した言であるから事実無根とは言いが、いずれも出版された形跡はない。その文業において、前期戯作者らしく中良が常に新しさを追求したことは、もちろん読本においても一貫していた。四作の読本を通じて、中良は一貫して新味を求め続け決して一点に止まるといことがなかった。彼が、「風草紙」の続編を書かなかった理由の一端は、ここに存するものと思われる。

また、第二作以降の読本執筆は、中良にとつてたのまれ仕事であった。詳細の分からぬ寛政四年から九年の白河藩出仕(「新撰洋学年表」)を措いても、医師としての仕事、蘭学者としての當為など、この時期から俄然流ただしくなる身辺の状況は、天明期から寛政期初めのような時間的余裕を彼に与えなかったはずである。それを証するように、読本二作目・三作目は手軽な翻案に終

始した。本稿で考察するように複雑な構想の下に書かれた「風草紙」の続編は、その意味でも反復を拒む作であったといえよう。

もちろん、中良にとつての新しいジャンル第一作ということもあった。それぞれの序跋によれば他の三作を版元の依頼に應じて仕上げたのに対して、この作のみ「彼書(「御伽婢子」)「英草紙」【繁野話】に効ひ、荒唐御言を實しやかに書綴り、拍掌奇談と表題して、夜話の宿槽にまふけ置」と自発的に執筆したものであり、周到で稠密な構成・文体は、そのような内的必然によってもたらされたものとも考えられる。さらには、前期読本以来の考証がこの作の主要な幹をなしており、文人中良の意欲に拍車を駆けたであろう。

なお本作には、上総屋の蔵版目録を付した後刷がある。さらに、「曠世奇談(天保四年刊)と改題再摺される。全九話の舞台は広く全国に及び、その意味で諸国奇談物の趣きをも衆目は感じ取つたのであろう。もちろん、そのような諸国奇談的な構成も【英】「繁」や【雨月】などの踏襲であった。先年『叢書江戸文庫32 森島中良集』に翻刻の機会を得たが、中良読本の最高傑作であるのみならず、江戸戯作者によって書かれた上方(前期)読本の末裔として、注意すべき読本のひとつであろう。

三

かつて徳田武氏が述べられ、私も別の観点から「森島中良集」

解題に記したことであるが、「風草紙」には、作者による隠微な体制批判が込められていると見ることが出来る。また、かつて私には、三作目の『玉之枝』（享和二年刊）を論じ、寛政改革頓挫後のその読本に、なお希薄にはあるものの体制（武家社会）批判の空気が漂っていることを述べた。それに比べるならば、『風草紙』に作者中良が込めた批判は、寛政改革の只中ということもあって熾烈であり、同じ理由によって巧妙に隠蔽されたものであった。この点を除いて「風草紙」を論じることは出来ない。

寛政改革下に書かれた「風草紙」は、九仕仕立ての内、いかにも時流迎合的に三分の二を教訓譚が占める。中良が同じく森羅子の号で教訓本の体裁をもつ「鄙都言種」を著すのは、やや遅れて寛政八年のことであった。しかし、その教訓本すらが単なる時流迎合的な教訓本でなかったように、「風草紙」には一見素朴な教訓的姿勢の裏に、強権のゴリ押しという野暮への揶揄が仕掛けられている。現体制への隠微な批判と言い換えてよいだろう。

文弱をたしなめた第一話「満珠が至孝母の禁獄を逃れしむる話」は、冒頭話ということもあって周到に仕掛けられた建前であって、この話は、むしろ女性の言を容れての為政者（源頼朝）の食言を印象に残す。後述するが、これを反転させたのが馬琴の「八大伝」冒頭であったと考えられる。

頼朝が、自らの命を狙ったがゆえに死刑を言い渡した女性唐糸に、その娘の助命嘆願を容れて賜った領地「一千町の化粧田に、

一千町の庄園を添」た計二千町とは、大層檢地以前であるから七二〇万歩として、約24平方キロメートル。現在の神奈川県百分の一にも当たる実に法外な広さであった。これは中良の計算違いなどではなく、頼朝の異常さ、そう言つてよければ狂気を現わすために掲げた数字であったと読み取れる。土牢に入れた唐糸一人の「番の侍」に、「健児五十人」を配したというデフォルメも、同様の意図から生じた極端な数字と言つてよい。「泉親衡物語」などを見るに確かに中良は義経爺頂であり、その意味でも頼朝には隔意を抱いていたと考えられるのだが、しかし、彼が「英」【纂】を踏襲する、即ち警世の書である「風草紙」の冒頭話として、この頼朝の食言（為政者失格）の話をもつて来る所に、彼の政事への視線を読み取つてよいはずである。

さらに言えば、この第一話の眼目は、武士政権の生みの親たる頼朝の好色非難にあった。

親子は夢の心地にて、其ま、御前を罷り立、安堵の菜地に家
居を構へ、与三（娘満珠の後見）に妻を呼迎へ、数多の家人
を召抱へて、安楽の身となりたるも、皆孝行の徳なりと、語
り伝へ侍りぬ。

と見える終結部、「与三に妻を呼迎へ」たのに対して、適齡期を迎えようという満珠の先行きは敢えてはかされている。しかし、その「安楽の身」が保証され得る唯一の状況とは、頼朝の妾以外にあり得まい。とすれば頼朝は、かつて「愛し給ひ、御傍近く召

仕はれ、御覚も厚」かつた唐糸と、その娘満珠という実の母子と交渉をもつことになる。その唐糸にしろ、頼朝の「御覚」を受けながら夫との連絡を絶やさず、「我女房なる事を、いよく深く包み隠し、自然の事の有ん時は、佐殿（頼朝）に近よりて、刺通し参らすべし」との命に従って短刀を隠し持つ女であった。これは幾重にも五倫を背馳した行状であり、江戸社会を根底で支えつつ、いまたた社会の前面に浮上してきた徳川の倫理は、さまざまに切り裂かれつつ「閑草紙」に描かれる。そもそも唐糸がスパイとして頼朝の側近く送り込まれた発端から、好色はこの物語中に遍在していた。

別の視点から窺えば、この冒頭話は、中良の江戸に対する愛憎が描かれたものと取つてよい。鎌倉と江戸をつなぐものこそ、武士政権の領する時空なのである。

抑相州小田原は、其地唐土の瀟湘に似て、山林勝れ、泉流潔く、昔在は霸王基を興し、花錦般なる都会なりしもと始まる起語において、一転中良は、

今は零々落々として、僻遠荒涼の郷となり、文治・建久の古跡、元享・建武の遺蹟、星の如く列り、碁の如く布たるも、野草狼藉として、其所とだにも見えわかず。去は興廢の蹟を吊ひ、懐旧の魂を傷しむる好人等、爰を詩歌の棄所となしにける。

と、鎌倉（江戸の投影）の零落した姿を描く。これはおそらく

「興廢の蹟を吊ひ、懐旧の魂を傷ましむる好人」ととつて、寛政改革によって往時の活気を失った江戸の町の姿であった。「詩歌の棄所」とはまさに天明文学の廢墟にふさわしい呼称である。

そうであれば、文武両道に達するを賞する第一話「横河の小聖、悪靈を降伏する話」は、なおさらのこと、単なる文武奨励譚とは受け取りにくい。

主人公鞍貫小弥太は武芸の家に生まれながら「京家の武士にも劣らざる、閑雅な壮士」であった。

太平日久しく、榮耀の余り、おのづから弓馬の道におこたり、一向詠歌に心を委ね……其身は此庵に閉籠り、詞の花の香を留ては、深く古の代をしのび、言の葉種に葉しては、猶も敷嶋の道のまだ見ぬ奥をなん尋ねける。

まさに、「雨月」に登場するとき、典型的に惰弱な「読本の主人公」であった。異形の者である愛人・歌と妻の綾瀬との闘争の間で、主人公の小弥太は全くの軟弱、「優に誑敷男」としてのみ登場し、「深くも歌が色に溺れ」る存在としてのみ描かれる。

綾瀬の勇氣によって甦った小弥太が、
「我恐にして弓馬の道に懈り、悪靈の為に死したるを、祖上の靈魂正統の絶なん事を憂へさせ給ひ、再生せしめ給へるならん」と、是より以往は行を改め、文を左にし武を右にし、家名を輝かせしとなり。

との認識に至る結語は、完全な付け足しと見える。そして、歌と

小弥太の蜜月、さらに乞食の嘔吐物を食べさせられる綾瀬の窮状を描く筆は、まさにエロチシズムの極致であったことを付け加えておく必要があるだろう。そのように、文武は、滑稽と好色との間にはかなく揺れる教条に過ぎず、閑雅は単なる言い繕いに過ぎない。

また、この物語の文勢は明らかに第一話を凌駕し、本来の冒頭話であった可能性を思わせる。それは、構成上、何らかの意図に基づき、あえて第一話に「滴珠」を据えた可能性ということでもある。この推定に従うならば、「滴珠」はより強く「風草紙」のもつ隠微を象徴する作ということになるだろう。

続く第三話「水鳥山人狸を酒の友とする話」では、飲酒逸樂を福の因とする。これこそ戯作者兼狂歌師の中良にとつても宝暦から天明時代に現前した過ぎ去りし幻影であった。かくてこの作は、酒と隠逸へのオマージュとして在った。狸と交友を結び、それによつて合戦の火の手から逃れるを得た主人公に、中良は十二分の共感を寄せている。その滑稽の筆は、あくまでも抑制の内にあるが、「逸楽こそ身を守る」とのメッセージは、寛政四年の新版物として挑戦的ではなかっただろうか。というのも、周知の通り、寛政二年五月、続いて同年九月に、文運東漸以後はじめての（つまり江戸を主対象とした初めての）出版取締令が発令されており、「風草紙」が成稿した寛政三年には、中良にとつても交わり浅からぬ山東京伝・葛屋重三郎への苛烈な懲罰が下されたばかり

りなのである。

寛政三年五月の禁令は四條¹²⁾。現代語に摘訳するならば、

・書物類の新版は町奉行所の許可制とする

・草紙絵本の類は、……「古代之事によそへ、不東成」ものを

禁ずる

・浮説を、写本などにして、「見料」を取つて貸し出すことを禁ずる

・作者不明の書物の売買を禁ずる

という内容であった。

そして、さらに四カ月後に出された九月の禁令は、

・あらゆる出版物に対して、風俗を乱すものを禁じる

というものであった。

「風草紙」をその内を含む寛政四年の新版物とは、これらの禁制を受けて出される初めての新春物ということでもあった。とりわけ、寛政四年春の新版物が出版ルートに乗ろうとする時期に駄目押しのように出された「風俗を乱す」出版物の禁令は、いくら俗書の王たる説本にとつても見過ごしがたいものであったに違いない。

先に見たように、「風草紙」が寛政三年十月に成ったことから勘案すれば、中良は九月の禁令への対応をその後の一ヶ月前後にしておいたはずである。さらに、同年十二月十五日に「¹³⁾風草紙」として不時割印を受けるまで（行司への草稿提出まで）、

微調整がおこなわれたと考えていいだろう。中良の読本でいえば、「泉親衛物語」に見るごとき大量の入木訂正の跡は「風草紙」には認められないため、対応がなされたならば、それは板刻以前であつたと考えられる。

ただし、その文章に關しては、「酒仙」を分解して「水・鳥(酉)・山・人」とする字解にはじまり、自在な筆で滑稽と考証とを横断し、容易に手の内を読ませない。

第四話「鳴海が亡霊女僕に小袖を与へたる話」では、奥向きの怪異が滅亡の因を成した戦国大名今川義元を描く。奇談ということで言えば、最も典型的な怪談の構成をもつ物語である。しかし、これもまた「奥」を描いて政治の不手際を際立たせる構造は、単なる怪談の趣向をこえたところに作者の含意を窺わせる。とともに義元の「他事なきいつくしみ」と一転残忍な惨殺は、第一話を反復して、為政者の好色と短慮、傲慢と因果を衆目に晒す。

第五話「夢中の怪三人疵を得たる話」は、高田衛氏の所謂「三人同夢」という奇譚の形を借り、馬術の腕を以て「鎌倉殿」(ここではまた頼朝の登場である)に取り立てられた先祖をもつ馬術の達人・都築織部が、夢(古代の遊女の霊)に翻弄される姿を描く。とりわけ、近親相姦をも暗示する、弟の肩先に噛みつく織部の妻・文布の姿は異彩を放っている。

ところでこれも第三話と同様に夢の考証が展開する、別の意味での前期読本の典型であつた。上方読本に胚胎した考証は、続く

江戸読本中に涵養され、江戸戯作者たちを巻き込んで、文化期以降の「考証の季節」に大きな影響を与えることとなる。その重要な当事者の一人が中良なのでもあつた。

そして、第六話「孝子の魂魄鶏と成て父母に福を与へたる話」に至って、作者は官僚の腐敗をあからさまに諷するに至る。ここにおいて、既に体制追従の表層に狎らされて来た読者の大部分は、もはや作者の真意を窺う感覚と術を失つていたことだろう。その長さといひ完成度といひ、また文勢といひ、第二話とともにこの短編奇談集の白眉と呼んで構わない一話である。原話の蟋蟀合せを翻鶏にしたことで物語の結構が一回り大きくなり、鬮鶏を論ずる冒頭部も映えている。

先に掲げた寛政三年五月の禁令、その「不束」とは、何よりも現政権への批判や不満を指していたであろう。穿った見方になるであろうが、それまでもつぱら「草紙絵本」を書いてきた中良に、では読本ならばどうかという気持ちは生じなかつたであろうか。「古代之事によそへ、不束成」ものへの禁制をすり抜けてやろうという思いはなかつたであろうか。

この年、ほかならぬ寛政改革の実行責任者である松平定信の白河藩に抱えられることとなる中良の選択をどのように解釈するか、これは中良の評伝の内に残された大きな問題のひとつといえるが、それが今田洋三氏のいわれるように「言論統制」の意味をもつたものであれば、そこにはこの「風草紙」の存在も含まれていたで

あろうか。ただ、中良は白河藩在藩中の寛政八年に読本二作目の「月下清談」を出すのであり、これは以後嗣出しなかつた海外情報ものとは異なつた対応と考えてよいから、その可能性は低いといえるだろうが。

ともあれ、ここに描かれる「貧吏」の傍若無人と、それに狎れた民の「賄賂」は救いようもなく陰湿で、これほどの官僚風刺が寛政改革下に書かれ公刊されたことには、驚きすら覚える。

続く第七話「松木左市父の讐を腹する話」で描かれるのは、武士の危殆とされる敵討である。巻四から巻五への移りも巧く処理され、些か異例といふべき神話世界の知識を展開させようとの欲求が、むしろこの作のモチーフであつたかもしれない。全九話のそれぞれに、別々のモチーフを窺わせるのも、この短編集の特徴であつた。それでもなお九話を揃えようとしたのは、まさに序文に言う通り「英」「繁」の後裔を自認したからにはかななるまい。それにしても、討ち果たされる敵の寝所にまで「添伏の女」を描くところ、中良の筆は徹底している。

さて、作者中良は、第八話「久含坊が仙術富民を誑かす話」で隠逸の道士を賞して現世致富を囁う。これは、分量といひ内容といひ、「風草紙」中では第三話と対応するような、あるいは芥川の「仙人」を思わせるような軽妙な一話であつた。中良の筆も、つらく思ひけるは……仙人と呼ぶれども、身重うして、一躍に二三尺の外飛事あたはず。高きに登れば目くるめき、足

の裏より痒を生ず。

のごとく滑稽に徹し、酒席に「暗厄里亜の玻璃瓊に、私郎察の酒壺」を取り出すなど自在である。中良における「道德」「正しき人」の根柢の根幹が「富貴に驕らず、貧人を設らず」であつたことは、「鄙都言種」などをはじめとするさまざま文章より窺えることであり、それはまた彼自身の人生訓でもあつた。ただ、そうは言いつつ、中良が賞するのは「見ぬ仙境の楽み」ではなくじつはどこまでも「酒筵」であり「妓」であり「美少年」であり、すなわち「人界の楽み」なのであつた。

そして、最終話である第九話「蒲生式部龍宮の侍女を妻とする話」では「性質虚弱にして文学にのみ志を傾け」る主人公が和漢古今の知識を極め、恋情を契機として榮達する姿を描くのである。性格設定が「月下清談」「玉之枝」の主人公に繋がることは注意されるが、恋愛を価値のひとつ、それも主要な価値とするところなど、王朝物語の雰囲気と漂わせる。しかし、物語の背景は戦国時代、そして中良が語っているのは、ほかならぬ当代なのである。異世界の女を娶るなどと、考えようによつては、これほど「風俗を乱す」物語もあるまい。それも舞台となる後陽成の治世（文禄年中）とは、まさに徳川時代前夜。皇室の威信回復に努め、豊臣政権下ではそれに半ば成功したかに見えた後陽成の「統御」（蒲生式部）を無力化したのが、徳川幕府なのであつた。

豊臣治世への祝言で終わる所も「雨月」を思わせるのであるが、

言い換えれば、そのことによって現体制への隠微かつ明白な批判意識の転嫁がなされているといつてよい。いかに物語中とはいえず秀吉を「豊臣殿下」「御身」「秀吉公」と呼び、埴ノ浦に「恨めしの源氏や」と託つ平家の亡霊を登場させるのが、全く無邪気な描写とは思いがたい。中良は、最後の読本となる「泉親衡物語」では義経の蝦夷脱出伝説を描き、徳川幕府の根柢となる源氏を再び祖上に乗せるのである。

以上、まことに駆け足で内容を論じたが、各話に描かれるのは武士の時代であり、合戦の場がその過半を占める。これもまた「英」「繁」以来の定形といえるであろうが、これは明らかに中良の批評意識が、支配者としての（あるいは支配者以前の）武士階級に向いていることの現れであった。言い換えれば、武士は如何にして支配者となったか、支配者たる資格は奈辺に存するかという「歴史的考察」のための実験室が、すなわち「風草紙」（中良における読本）なのであった。

四

「風草紙」全九話の内の七話が「聊齋志異」を粉本とすることが指摘されている。¹⁷

この作の典拠が「聊齋志異」であることは、四作目の読本「泉親衡物語」（文化六年刊）の巻末広告に、「風草紙世編」との角書きをもつ「狐の裘」を予告することからも知られる。「狐の

裘」とは、「聊齋志異」の巻頭「自誌」に見えて著名な「怪異を綴る」ことの比喩であった。すなわちこれは、「風草紙」が「聊齋志異」との関連を有する、中良自身によるレトリカルな証言であった。しかし、「風草紙」の構成が、巻一（一話）、巻二（一話）、巻三（三話）、巻四（一話半）、巻五（二話半）となっていることは、類書の中でも異例と言つてよい。とりわけ、一話（第七話「松木復讐」）が二巻に互る例は、中良が自叙に挙げた「英」「繁」のみならず、いずれも短編の編纂した前期読本でも珍しい事例であった。

これについては、二つの方向で理解することが可能であろう。ひとつは構成の不備に帰する考え方であり、二つは、構成の不備と思われてもなお中良がこの順序を守りたかったという考え方である。後者を取るのであれば、この構成自体に何らかの意図が籠められていたと考えるべきであろう。そして私は、この考え方を取る。繰り返すが、中良はこの作を、その名を挙げた「英」「繁」や、その名を挙げることもなかった「雨月」などに比すべき作と自負していた。その自負の内実こそ、単なる物語としての高度な達成のみならず、隠蔽すべき隠微の存在であったはずであろう。

寛政五年までに、中良が「雨月」の秋成作であった事実を知っていたか否かは明らかではない。私は、彼がその事実を知り得たのは、寛政九年度の上り行ではなかったかと考えている。というのも、中良自筆のノートに見える「秋成Ⅱ」「雨月」の作者¹⁸説は、

この上方行の覚書の部分に見えるからにはかならない。

もしそうであれば、「凧草紙」の成立時、「雨月」の作者を中良は知らなかったわけであるが、しかし、そのことと、既に彼が「雨月」を読んでいたか否かということとは直結しない。むしろ、それが何の脈絡もなしに先方から飛び込んでくる情報であったとは思われない以上、上方行で「雨月」の作者を知ろうと試みたことが想定でき、そのことは中良に既に「雨月」の知識があった（それを重要視したであろう）ことを窺わせる。

ところで、この作の後代への影響を窺うならば、先ず後期読本を代表する雄編「南総里見八犬伝」を挙げるべきであろう。例えば「八犬伝」の発端である「言の咎」の場面は、「凧草紙」第一話にその先蹤を見得るのではないか。馬琴が中良に親炙していたことは、「近世物之本江戸作者部類」などに示されている通りである。「椿説弓張月」に中良の「琉球談」が利用されていることはよく知られるが、これはまさに氷山の一角であった。その馬琴の中良への敬愛の背景には、四方歌垣真願などとの交際も大きかったと思われる。

そうであれば、「凧草紙」とは、前期（上方）読本と後期（江戸）読本それぞれの最高峰と呼べる「雨月物語」と「南総里見八犬伝」とを、具体的に仲介する読本であったということになる。

長く馬琴は「雨月物語」の作者が上田秋成であることを明記した最初の江戸人であると言われて来たが、実はその榮譽を担うべき

人物は森島中良であったことが分かっている。つまり、「雨月」を介しても、秋成・中良・馬琴というラインが描かれるのである。中良にせよ馬琴にせよ、「雨月」の作者を知り得たのは上方での情報、言い換えれば「雨月」の秋成作を知っていた人々はすでに上方に存したわけであるが、これは興味深い人的連続と言えるのではないだろうか。

五

このように、全九話構成を取る「凧草紙」は、（上方）読本の権輿かつ典型たる「英」「繁」などと同様の性質をもちつつ、その中に後期江戸読本への過渡的な性格をも抱えた折衷的（それは後代人の目から見ての評言であり、当時の視座に立てば古典的でありなおかつ先端的）な読本であった。たとえば考証と美文、滑稽と教訓、エロチシズムと啓蒙などといった対照的かつ通底的、多様で多彩なモチーフとテーマとプロットに満ち、実に魅力的な読本と呼べる。

「凧草紙」が、「雨月物語」に匹敵するほどの作であるという評価の如何に拘わらず、もとよりこの作は、この枚数で論じ去り得べくもない対象と言える。今後、専家によってこの作への考究がより深められることを念じつつ、その呼び水ともなればと敢えて蕪論を草した次第である。

体制批判という語を副題に用いたが、それが寛政改革下の体制

に限るのか、また別のものなのかは、本稿の範囲だけでは検討できなかつた。また、近代的用語を用いることの当否については、中良の意識は思想・言論の自由の認められた現代にあつても、須らく先鋭的に社会の矛盾を矛盾として捕らえたであらうことを含めて、こゝ呼んでおきたい。

注

- 1 石崎又造「遊覧日本支那俗語文学史」(弘文堂書房)、徳田武「限草紙」と「聊斎志異」(「日本近世小説と江戸小説」所収)、大高洋司「江戸説本の展開」(横山邦治編「説本の世界」、園田豊「雨月物語」と「限草紙」)(石上敏校訂「叢書江戸文庫森島中良集」月巻)。
- 2 ただ、署名下の印「大小」が何を表しているかは不明。中良の事蹟の内で「大小」といえば、明和初年に流行した大小暦の会が思い浮かぶが、ここに用いる脈絡がつかめない。一方中良はこの寛政四年より白河藩に出仕し、その生涯で初めて「大小」を腰に指すこととなつたが、それと結びの唐突であらう。もしその時点で白河藩出仕が決定していたというのであれば、「大小は武士の魂」の詞もある通り、自らの境遇の急変を自照した呼称としてあり得ない連想ではないが、寛政九年の致仕以後もこの印を用いる事實は、この連想の妥当性を著しく低める。また、歌舞伎の下座音楽としての「大小の相方」や替紙の終わりに用いる「大小の神祇」など、さらにいくつかの連想も浮かぶが、彼がしばしば無頼の徒と自称する戯作者意識に立ち返れば、「大小の神祇祖」も思い浮かぶ。あるいは、先に見た通り彼が世界第一の物語作者羅漢中を意識している

ことからは、日本第一の物語作者である紫式部の言「大小の事を隔てず、何事も御うしろみとおぼせ」(源氏物語「賢木巻」)が氣に掛かる。また、最大の劇論「花説」の「大小にわたるは、ひろき能なるべし」などが意識されていた可能性も考えられるが、いずれも確証はない。これらはいずれも、中良の説書圏内に存在する必携書であつた。

- 3 注1の大高・園田各論文。
- 4 国会図書館蔵「万象随筆」所収「代紳漫抄」。既に中野三敏氏「庶録」(「二」(「書誌学月報」4)に指摘がある)。
- 5 寛政改革の出来により、中良が読本に戯作執筆の突破口を見いだそうとしたことも新機軸の導入を後押ししているものと考えられる。中良にとつても寛政改革が読本執筆の要因であつたことは間違いない。
- 6 注1の徳田論文。
- 7 拙著「万象彩森島中良の文事」(翰林書房)第四章第四節。
- 8 「森島中良集」解題参照。
- 9 注7の拙著第二章第五節。
- 10 頼朝への御檢は師匠平賀源内の「そしり草」とも共通する要素である。「そしり草」は近年非源内作に傾くが、国会図書館蔵本(ただし写本)が源内作を語る中良の識語を載えており、作者同定に右の点も看過できない。
- 11 戯作が、こぞって江戸を鎌倉に仮託する慣例も、ただ単なる通例を越えた要素(武士政権なるものへの意識)を読み取るべき場合があるはずである。中良に関しては、別に改革への黄表紙執筆の可能性を述べた(注7拙著第四章第三節)。
- 12 「聊斎志異」(岩波書店)に従う。

13 『江戸幻想文学誌』（平凡社）。

14 今田洋三『江戸の本屋さん』（日本放送協会）。中良の定信に対する意
識は、これを記したのを見いだせない現在のところ、未詳としておく
以外にないが、仕官から五年後の寛政九年の致仕を、終生をかけての帰
属意識をもてなかった証左とすることは許されるであろう。

15 中良がその方面に並々ならぬ素養を有していたことは、天明初年成立
の『兼文』〔ひろはく 屁放大神大御伝（ひろはく）〕（多くは『古事記』に拠る）を基に、注7の
拙著第四章第一節に論じた通りである。

16 各話の主題等については、『森島中良集』解題に一覧した。

17 注1の徳田論文。

18 その意図について、一語ずつの詳細な検討を経つつ改めて論じたい。
ここでは、中良が『雨草紙』の巻次（構成）にまで周到な注意を払って
いたと類推するにとどめる。

19 園田氏が、『雨月』と『雨草紙』を仔細に比較されたように（注1論
文、そのことは『雨草紙』の内部徴証からも補足され得るだろう）。

20 『雨草紙』をはじめとする中良の説本、延いては文事全般の馬琴への
影響については、稿を改めて論じたい。

〔付記〕本稿は、大阪商業大学研究奨励助成及び文部省科学研究費による
研究成果の一部である。

（いしがみ さとし 大阪商業大学助教授）

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ（平成一〇年一月～十二月）

単行本

葎 第三号（山崎勝昭）

王朝物語叢攷―平安後期を中心として―（大原一輝）

大妻女子大学文学部三十周年記念論集（大妻大学）

句集 花石榴（平松万砂流）

研究叢書二一―平安後期歌学の研究（和泉書院）

第2回シンポジウムコンピュータ国文学講演集（国文学研究資料

館）

天使の手帖（中原中也記念館）

中原中也とランボー（中原中也記念館）

藤原家隆の研究（松井律子）

湖の本 二 花と風・隠国・翳の庭（秦恒平）

五 京言葉と女文化・京のわる口（◇）

◇ 二 中世の美術と美学・上（◇）

◇ 一三 ◇ ・中（◇）

◇ 一四 ◇ ・下（◇）

◇ 一六 死なれて・死なせて（◇）

◇ 一七 漱石「心」の問題―「静」と静かな心と―（◇）

◇ 三二 北の時代≡最上徳内・上（◇）

◇ 三三 ◇ ・中（◇）

◇ 三四 ◇ ・下（◇）